# だいこく通信　第五十三号「春の号」

## ごあいさつ

当神社の境内には臘梅の木があります。社殿と境内を整備した際に植木屋さんが植えてくださったもので、早春には可愛らしい花をたくさんつけていました。ところが、五年ほど前、東京に珍しく大雪が降った際、積もった雪の重みで木自体が大きく折れてしまいました。翌年は全く花が咲かず、もうだめになってしまったかと思ったのですが、植木屋さんには、根本のほうは元気だから大丈夫と言われました。本当にそうかなと思っていたところ、数年前から十二月頃になると、地面に近いところで少しずつ花が咲くようになりました。今年も少しだけですが、黄色い花を咲かせていました。花の甘く優しい香りからは想像できない、木そのものの生命力に毎年驚かされています。

さまざまに難しい問題が多く、大変な世の中ですが、臘梅を見るにつけ、わたくしたちも力を蓄え、いつか花を咲かせることができるよう努めたいものだと思います。

社報「だいこく通信」第五十三号をお届けします。

今回の内容は、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。

## お宮あれこれ～「縁日」の話～

神仏について、この世にゆかりのある日のことを「縁日」と言います。当神社の御祭神である大国主命（オオクニヌシノミコト）の縁日は「甲子（きのえね）」の日とされます。当神社の祭礼にも、六十日ごとの「甲子」の日に執り行う甲子祭があります。このように、暦の上で、特に干支によって縁日が決まっている神様は大国さまのほかにも、帝釈天さま、弁天さまなどがいらっしゃいます。そこで、今回はこの三柱の神様と、その縁日についてお話しいたしましょう。

（大国さま）

まず、大国さまについて。当神社がお祀りしているのは、日本神話に登場するオオクニヌシという神様です。一方、「大黒天」と「黒」の字を書く神様もいらっしゃいます。もともとヒンドゥー教から仏教に入った神様で、サンスクリットの「マハーカーラ（マハー（大きい）＋カーラ（黒））」という名前でした。破壊をつかさどるとされ、恐ろしい形相をもつものとして表現されることが多い神様です。この神様への信仰が中国を経由して日本にもたらされ、日本神話の神様と重ねて受け入れられたと言われています。

日本では大国／大黒さまをお祀りする「甲子待（こうしまち）」という行事がおこなわれていたそうです。「甲」は十干、「子」は十二支の、どちらも第一番目にあたるところから「甲子」がご祭礼の日とされたのではないかと考えられます。

また、大黒天は北方の神とされていたようです。北は十二支であらわすと「子」の方角でした。また、古代中国の「四神」においては、北を守る聖獣は「玄武」とされます。「玄」は「黒」という意味なので、ここから大「黒」天と結びついて、北を守る神と捉えられたのかもしれません。

さて、「甲子待」については、江戸時代の文献に「三都とも二股大根を供す。又、江戸にては七種菓子とて七種七銭の麁菓を供す」〔守貞漫稿 - 二三〕とあるそうです。行事の際、縁起物として二股大根を供えましたが、江戸では、京都、大坂と異なり菓子も供えていたことがわかります。また、大豆、黒豆を供えたり、行燈などの心を買い求めたりする習俗もあったそうです。

（帝釈天さま）

有名な柴又の帝釈様の縁日は「庚申（かのえさる）」の日です。その由来についてお話しいたしましょう。

帝釈天は仏法の守護神の一つです。もとはバラモン教の神で、インド最古の聖典『リグ・ベーダ』のなかでは、雷神であり、戦いの神とされています。阿修羅（あしゅら）との戦いがよく知られており、須弥山（しゅみせん）の頂上にある忉利天（とうりてん）の善見城（ぜんけんじょう）に住んでいて、四天王を率い、人間界をも監視すると言われます。

帝釈天の縁日は、日本独自の庚申信仰にさかのぼると言われています。「庚申待ち」「宵庚申」ともいわれる風習で、「庚申」の日に、人々が家に集まり、夜を徹して酒食を共にして語り合うというものです。このとき、祭神として仏教では青面金剛（しょうめんこんごう）、神道では猿田彦がまつられます。

この風習は、中国の道教の「守庚申」という行事がもとになっています。昔の中国では人の体内には三尸（さんし）虫が住んでいると信じられていました。庚申の夜に眠ると、この三尸の虫が天に上って、その人の罪科を最高神である天帝に告げるとされていました。そうなれば、寿命を削られてしまいます。そこで、庚申の晩は身を清めて三尸が天に上るのを防ごうとしたというわけです。この行事がわが国に伝わり、それに仏教と神道とが混交して独特の民俗的祭事になりました。庚申講というグループが作られ、祭事は講の家を順番に回って行ない、終わると酒食が出て夜明けまで歓談をともにしました。そのため、江戸以来、庶民の社交の場ともなったそうです。

中国で仏教・儒教・道教が合わさっていく中で、帝釈天は天帝と同一視されました。先にも述べましたが、帝釈天は人間世界も監視しているので、三尸の虫の考え方とも通じるところがあったようです。そして、帝釈天が仏教とともに日本に入ってきて、庚申信仰に結び付けられました。こうして帝釈天の縁日は庚申の日ということになっていきました。

ところで、猿は帝釈天の使いとされていますが、それはなぜでしょうか。庚申さまとしてまつられるのは、先にも述べた通り、仏教では青面金剛が多く、三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）を伴う場合もよくあります。

古代インドのサンスクリット叙事詩「ラーマーヤナ」では主人公ラーマ王をヒンドゥー教の主神の一つビシュヌの権化として描いています。物語には神猿ハヌマーンが登場してラーマ王を助けます。南方熊楠は、庚申信仰で本尊とされる青面金剛は、ビシュヌ神が姿を変えたものだとし、青面金剛に三猿が従うのは自然なことだと述べています。そして、「庚申」が

「申」の日であることも相まって、猿が帝釈天のお使いとされたのでしょう。

（弁天さま）

弁天様の縁日は「己巳（みずのとみ）」の日です。その由来についてもみていきましょう。

弁天様、正式には弁才天は、仏教の智慧、弁舌、技芸の女神です。妙音天、美音天、大弁才功徳天とも呼ばれます。サンスクリット（梵語）の「サラスバティー（水を有するもの）」を訳したものです。もとはヒンドゥー教の神で、アーリア人が東へ移動したとき、各地の川をこの名前で呼びました。古代インド・バラモン教の聖典の一つであるブラーフマナではことば（バーチュ）の神とされました。同じくバラモン教のウパニシャッド聖典では音楽神とされています。ヒンドゥー教のこうした考え方を受けて仏教に弁才天を登場させたのが『金光明最勝王経』というお経です。ここで弁才天は、この経を説く人や聞く人に知恵や長寿や財産を授けるとされているそうです。その図像的表現は八臂（はっぴ　「臂」はひじのことで、八本の腕を持っているという意味）または二臂の姿です。美しい容姿で、琵琶を持つことがあります。日本では財産の神としての側面に注目して、弁財天と書かれるようになり、また七福神の一つとされています。

弁才天は、多く水辺に祀られます。これは、先に述べたようにサンスクリットで「サラスバティー」と呼ばれた川を神格化したところに由来するものでしょう。

また、弁才天は水と関係ある蛇と結び付けられることも多くみられます。弁才天の姿を表現した図像などでは宝冠の中に白い蛇が描かれることがよくあります。サンスクリットで蛇は「ウラガ」といいます。古代日本の食物の神「宇賀神（うがじん）」が中世に弁才天と習合されました。そのため、弁才天と蛇が結び付けられたのでしょう。

ちなみに、日本では縄文土器に蛇の意匠がみられることから、先史時代に蛇への信仰があったとされています。また、農耕地帯では、初夏の季節に大蛇があらわれるとその年は必ず豊作になるという言い伝えがありました。

わが国では、滋賀県の竹生（ちくぶ）島、神奈川県の江の島、広島県の厳島（いつくしま）（宮島）のいわゆる三弁天や、鎌倉の銭洗（ぜにあらい）弁天がよく知られています。

神社やお寺をご参拝になる際は、縁日につながるさまざまな歴史を考えてみるのもおもしろいのではないでしょうか。

参考文献　［以下ジャパンナレッジ利用］『日本国語大辞典』（小学館）、『日本大百科全書』（小学館）、『世界大百科事典』（平凡社）、『国史大辞典』（吉川弘文館）

## 祭礼・祈祷などのご案内

○次回甲子祭

令和五年五月六日（土）　午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭　毎月一日　午前六時～正午まで

○諸祈祷受付　商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは以下の電話番号もくはメールにてお願いいたします。

不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しください。のちほどこちらからご連絡いたします。

〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話　○三―三九一八―七九三〇

携帯　○八〇―一九八七―八七一六

eメール　daikokujinja@gmail.com

## 次号発行予定

「だいこく通信第五十三号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和五年七月五日甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第五十三号　令和五年三月七日発行

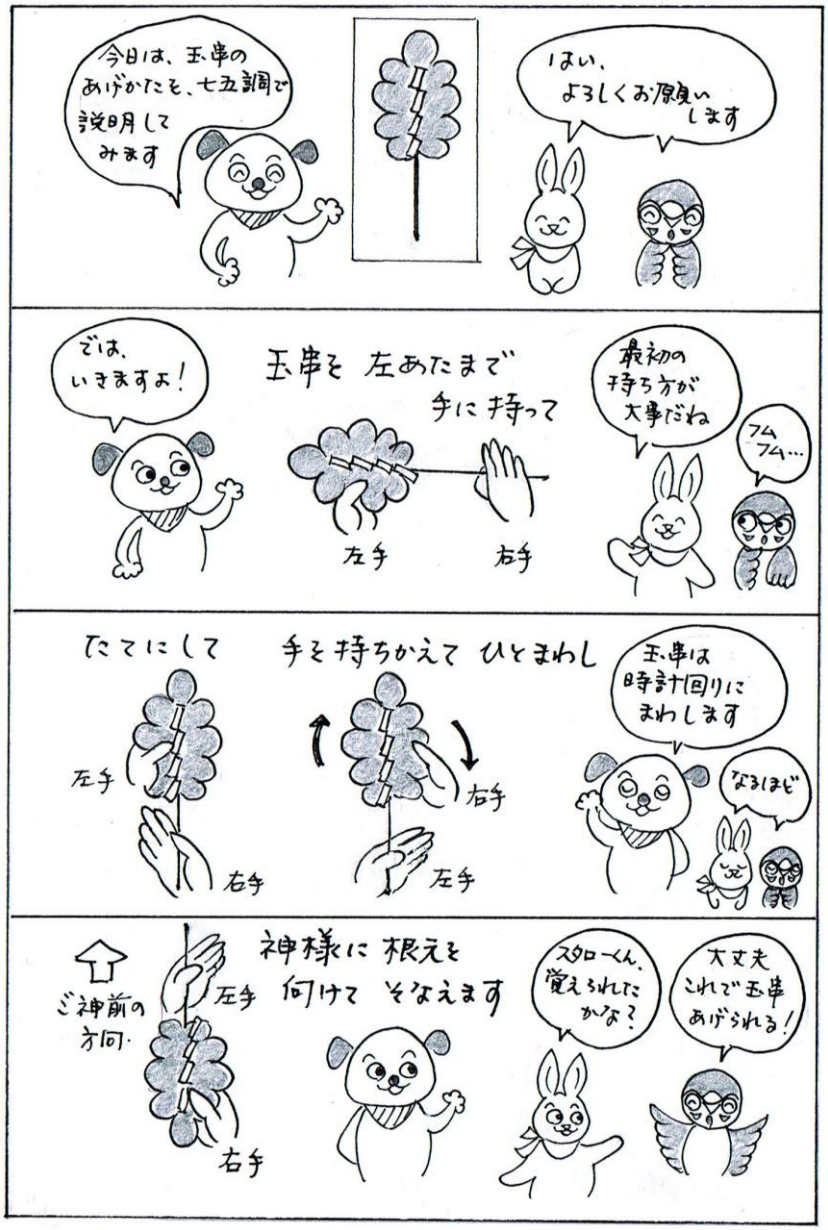
編集・発行　大國神社社務所

〒一七〇―〇〇〇三　東京都豊島区駒込三―二―十一

http://www.daikokujinja.org

(連載まんが)

# 大吉うさぎ

## ～神社豆知識　その14～

くま　こまち　作